山上憶良（やまのうえのおくら）

山上憶良は、奈良時代初期の下級貴族出身の官人であり、歌人として名高く、万葉集に約80首の歌が収められています。憶良は、「子等を思ふ歌」「貧窮問答歌」など、庶民の生活や子どもを思う親心、家族愛を詠んだ歌を多く残しています。

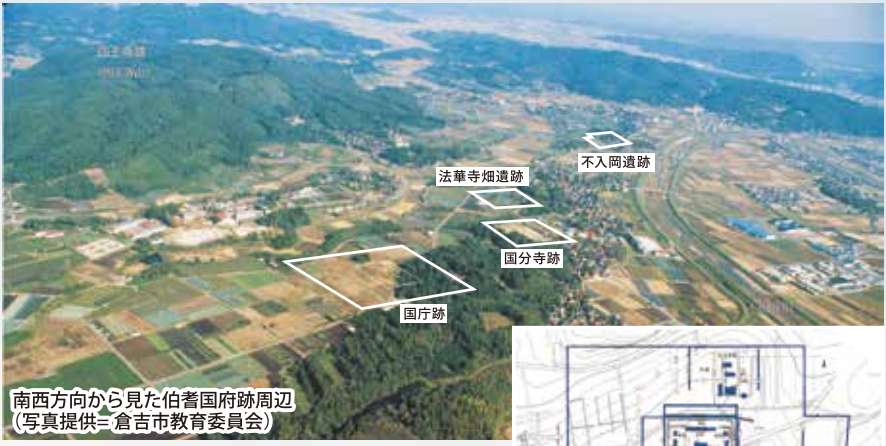
660年頃の生まれと推定され、出自は諸説あり、よくわかっていません。42歳で遣唐使書記に抜擢され、唐に渡り最先端の文化に触れて帰国し、54歳の時に上級官人、716（霊亀2）年に57歳で国守となり、伯耆守に任命されました。その後、726（神亀3）年に67歳で筑前守として赴任し、その地で妻を亡くした大宰府の長官 大伴旅人（大伴家持の父）に挽歌を献呈したことを機に旅人との交流を深め、この旅人との交流が、憶良のその後の活発な作歌活動を生んだとされています。

また、筑前守に赴任した4年後の730（天平2）年に、大伴旅人の邸宅で開かれ、令和の典拠となった梅花の歌32首が詠まれた梅花の宴に出席しています。梅花の歌32首の4番目に歌を詠んでいるのが憶良です。この宴で詠んだ「春されば まづ咲くやどの 梅の花 独り見つつや はる日暮らさむ（春になると最初に咲く屋敷の梅の花よ、私ひとりで眺めながら、ただ春の一日を暮らすことにしよう）」は梅花の歌32首中の最も優れた歌とされ、憶良の代表作のひとつとなっています。

筑前守を退いて帰京した後、733（天平5）年に病気により74歳でその生涯を閉じました。

憶良は伯耆国（現在の鳥取県中部・西部）の国守として、約5年間を伯耆の地で過ごしたとされています。伯耆国赴任中の歌は確認されていませんが、赴任した間に体験、見聞きした伯耆の自然、文化がこの後の歌づくりに影響したと考えられています。

後に因幡国（現在の鳥取県東部）の国守として万葉集の最後を飾る歌を詠んだ大伴家持も憶良の影響を強く受けていると言われています。憶良の「士（そのこ）やも 空（むな）しくあるべき 万代（よろづよ）に 語り継ぐべき 名は立てずして（男子として、空しく人生を終わってよいものだろうか。万代の後まで語り継いでいくよう名を立てずに。）」に対して、家持は「大夫（ますらを）は 名をし立つべし 後の代に 聞き継ぐ人も 語り継ぐがね（大夫は立派な名を立てるべきである。後の世に聞き継ぐ人もまた語り継ぐように。）」と追和しています。



南西方向から見た伯耆国府跡周辺
（写真提供＝倉吉市教育委員会）

伯耆国庁跡全体図（提供＝倉吉市教育委員会）

①伯耆国府跡／伯耆国庁跡・法華寺畑遺跡・不入岡遺跡（国史跡）

伯耆国庁跡、隣接する法華寺畑遺跡、国庁跡から北東に約1.5km離れた不入岡遺跡で古代伯耆国府に関する遺跡が確認されたため、一括して伯耆国府跡として国の史跡に指定されています。

国庁跡は奈良時代から平安時代に至る役所の跡。倉吉市社地区には国庁・国分寺・国分尼寺が近接して置かれ、当時の伯耆国における政治、経済、文化の中心地となっていました。

伯耆国庁の復元イメージ

山上憶良が伯耆守として赴任した8世紀初めは、この国庁はまだ建立されておらず、憶良が勤務していたのは不入岡遺跡で見つかった初期の国庁と考えられています。

法華寺畑遺跡は国府の役所であったものが、国分尼寺に転用されたと考えられます。

所 倉吉市国府・国分寺・不入岡

交 JR倉吉駅バス2番乗り場から社線・北谷線「国府」下車、徒歩10分（不入岡遺跡は徒歩20分）

法華寺畑遺跡 復元西門

不入岡遺跡

伯耆国分寺跡（写真提供＝倉吉市教育委員会）

②伯耆国分寺跡（国史跡）

741（天平13）年、聖武天皇の勅願による寺院跡。東西182m、南北160mで、南門、金堂、講堂、塔などが確認されています。

所 倉吉市国府・国分寺

交 JR倉吉駅バス2番乗り場から社線・北谷線「国府」下車、徒歩10分

※交通情報は2019年10月現在のものです。